

鎌倉光明寺所蔵『元祖大師五百五拾年御忌規鑑』（仮題） 紹介と翻刻

横 田 友 教

はじめに

近世における法然上人御忌法会がどのように行われたのかは、一部の大寺院を除き、あまり研究されていない。そこで本稿では、御忌の歴史を垣間見る一助となるよう、鎌倉光明寺で宝暦十一年（一七六一）に行われた法然上人五百五十年遠忌の記録である『元祖大師五百五拾年御忌規鑑』を翻刻し、紹介する。

一．関東有数の御忌

藪内彦瑞編『知恩院史』（一九三七）によると、近世知恩院では一七日昼夜にわたり盛大な御忌が営まれていた。<sup>(1)</sup>特に五百回忌以降の遠忌は勅会によって行われ、例年よりも盛儀を極めている。まさに関西を代表する御忌法要といえる。一方、関東ではどうか。宇高良哲氏は『近世浄土宗史の研究』（二〇一五、青史出版）の中で、増上寺の御忌法要や、深川本誓寺、小金東漸寺といった諸檀林における永代御忌執行の契機について述べられてい

る。<sup>(2)</sup> この研究を踏まえ関東を代表する御忌として注目するのが、増上寺と鎌倉光明寺、そして小金東漸寺である。東漸寺は享保二十一年（一七三六）から知恩院を模して、永代御忌が執行される。詳しくは宇高氏の研究を参照されたいが、他の檀林寺院で御忌が永代執行されるのは江戸後期からであり、これは珍しい事例である。この特例を除くと、檀林首座である増上寺が注目される。しかし宇高氏によると、増上寺の御忌は文政十二年（一八二九）以降に永代厳修される以前、正月二十四日と二十五日に、他の歴代上人の忌日法要と同格程度の法要がなされているだけで、特別な法要ではなかったようである。この背景には、正月二十四日に台徳院の祥月忌が行われていたことが影響しているのではなからうか。二十三日の初夜法事に加え、二十四日の御成による繁務で、御忌を盛大に行えなかったと考えられる。この点において他の檀林の方が増上寺よりもゆとりがあり、御忌に力を注いだと思われる。中でも光明寺は関東惣本山と称されるほどの有力寺院であり、近世に入って増上寺にその地位を奪われるものの、依然多くの末寺を有していた。このような点から、関東有数の御忌として光明寺が注目される。

## 二. 『元祖大師五百五拾年御忌規鑑』について

本書は表紙が欠落しており、加えて内題もない。そのため光明寺の蔵書目録が収録されている『鎌倉市文化財総合目録 古文書・民俗篇』（二九八五、同朋舎）では、『浄土宗元祖源空五百五十年忌記録』という仮名称で収録されている。ここであらためて仮題を考えてみるに、本書は光明寺で宝暦十一年に行われた法然上人五百五十年遠忌に関する記録をまとめたものである。そして同寺には、『元祖大師六百年御忌規鑑』（外題：『弘覚大師六百遠忌御忌記録』）という法然上人六百年遠忌の記録も所蔵されている。どちらも編年体で整理された同系統の史料である

ことから、これを参考にして本稿では『元祖大師五百五拾年御忌規鑑』と仮題を付ける<sup>(3)</sup>。成立時期は不明であるが、内容に宝暦十一年一月二十六日までの記録が含まれているので、それ以降となる。編者については、光明寺役者が諸役を呼び出して申し付けた内容や、役者発の回文が散見されることから、光明寺役者によるものと考えられる。これらの書誌情報をまとめると、次の通りである。

- 一、所蔵 大本山光明寺
- 一、書名 元祖大師五百五拾年御忌規鑑（仮題）
- 一、刊写 写本
- 一、数量 一冊
- 一、丁数 二十丁
- 一、成立 宝暦十一年一月二十六日以降
- 一、装丁 袋綴（現装：結び綴）
- 一、表紙 欠落
- 一、大きさ 縦〔23・8 cm〕×横〔16・6 cm〕
- 一、備考 虫損あり

光明寺所蔵の関連資料には、『元祖大師報謝金扣』（二七五八）と『元祖上人五百五十年御忌ニ付末山御報謝金銀錢之写』（成立年不詳）がある。どちらも遠忌に際し、末寺や信者から集めた報謝金の記録帳で、少なくとも『元

祖大師報謝金扣』は本書作成の参考に用いられた可能性が高い。なお存在したかは不明であるが、該当年の日鑑は現存していない。

最後に内容について少し触れておく。遠忌法要は宝暦十一年正月二十二日の初夜法事に始まり、二十五日まで浄土三部経の三百部読経が行われた。中でも二十三日と二十四日には、半齋、読経、読経、初夜と、一日四座の法要が勤められている。ただし当時凶年が続いており、末寺から納められる報謝米がなく、例年と違い方丈における齋や非時はなかった。なお光明寺所蔵の『開山禪師五百遠忌法事記并香奠記』や『元祖大師六百年御忌規鑑』によると、天明六年（一七八六）の記主禪師五百年遠忌と、文化七年（一八一〇）の法然上人六百年遠忌では、共に千部会が行われている。関東有数の御忌ではあるが、同寺で行われた他の祖師法要と比べると、法然上人五百五十年遠忌は規模を縮小して執行されたことが分かる。

註

- (1) 第二篇第五章「御忌と勅会」
- (2) 第二十七章二「御忌法要」
- (3) 『鎌倉市文化財総合目録』では、『元祖大師六百年御忌規鑑』を『浄土宗元祖源空六百遠忌記録』という名称で収録している。内題や外題があるにも関わらず別名を用いていることから、本稿では五百五十年遠忌の記録についても『鎌倉市文化財総合目録』で使用されている名称は採用しない。

## 【付記】

本稿執筆にあたり、史料の調査並びに撮影を許可していただきました光明寺様には、厚く御礼申し上げます。

## 【凡例】

翻刻に当たり、努めて底本の体裁を尊重したが、便宜上、原形を改めた部分もある。およその基準は以下の通りである。

(一) 文中に適宜、読点（、）並列点（・）を加える。

(二) 底本に使用されている正・略・異体などの文字は、原本の用字を尊重したが、入力の関係上、一部現今通用の字体に改めている。

一例…「回」↑「回」・「畢」↑「己」の下に「十」

(三) 文字の上に別字が重ね書きされている箇所は、後から書かれた文字を本文に示し、先に書かれた字を×を冠して傍注する。なお、先に書かれた字が判読できない場合は、（×■）と傍注に記す。

(四) 変体仮名は、江（え）・者（は）・茂（も）・而（て）・与（と）・ハ（は）のほかは平仮名に改める。また方はヨリとする。

(五) 闕字は全角一文字分に統一する。

(六) 各丁の左下には、「」で丁数と表裏を記す。

(七) 送り仮名以外の小文字は大文字に改めた。

なお写真に関して、四丁目裏一行目「増上寺」の左側に文字が確認できるが、これは五丁目の紙面の一部が付着しているものである。

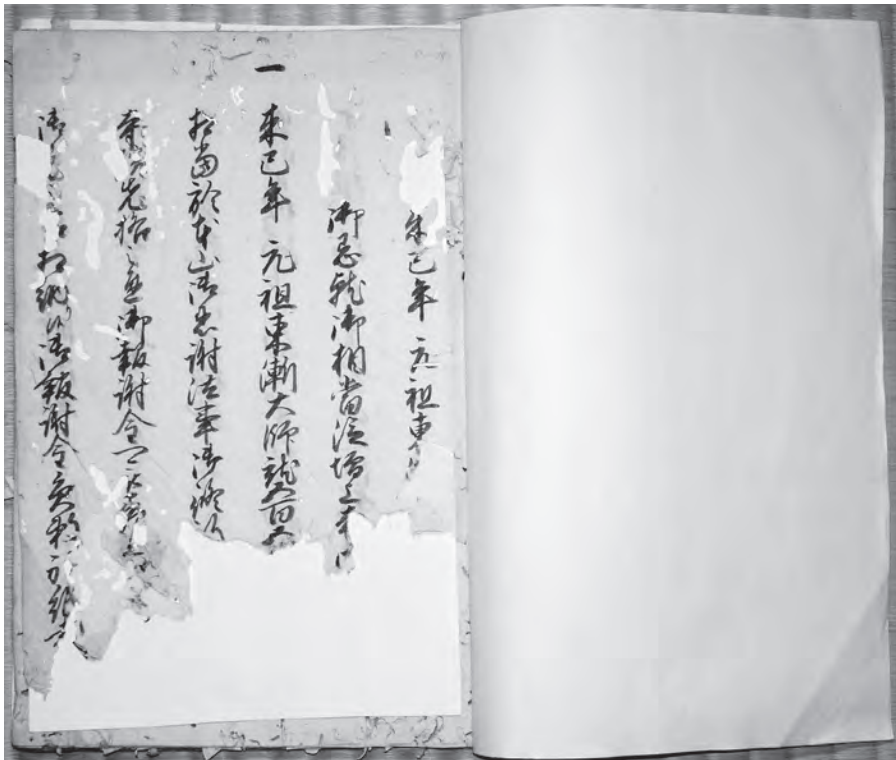
〔表紙〕



〔裏表紙〕



鎌倉光明寺所蔵『元祖大師五百五拾年御忌規鑑』（仮題）  
紹介と翻刻



来巳年 元祖東

御忌就御相當

一 来巳年 元祖東漸大師就五百五

相當於本山御恩謝法事御修行

寺先格之通、御報謝金可被差上

別紙に御報謝金員数、別紙

来巳年 元祖東<sup>(漸力)</sup>

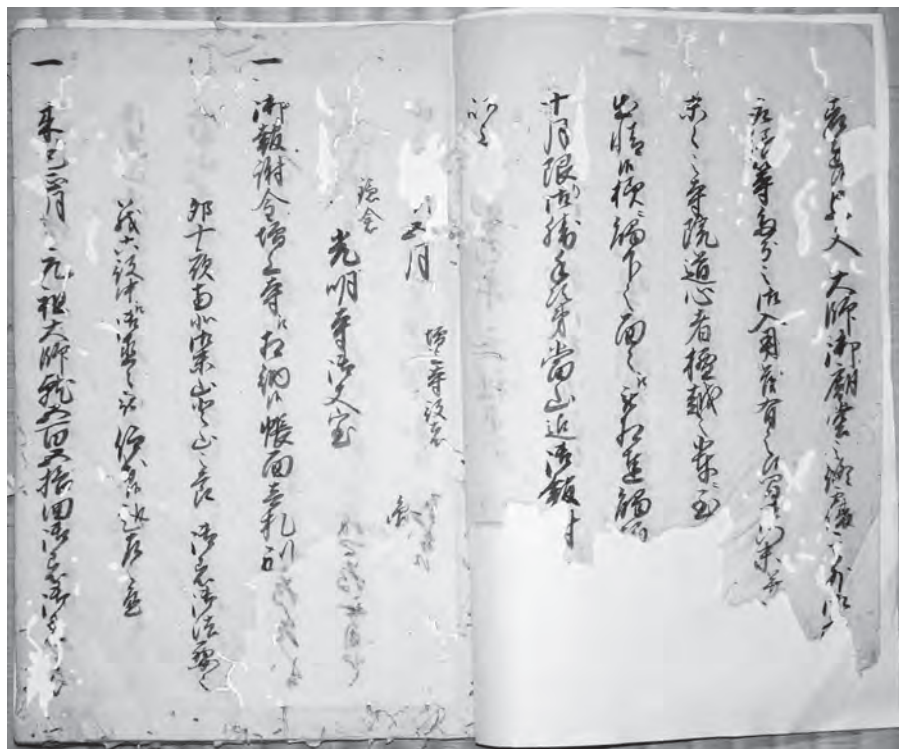
御忌就御相當、從増上寺

一、 来巳年 元祖東漸大師就五百五

相當、於本山御恩謝法事御修行

寺<sup>(院)</sup>、先格之通、御報謝金可被差上

御□□□相納リ候、御報謝金員数、別紙□□

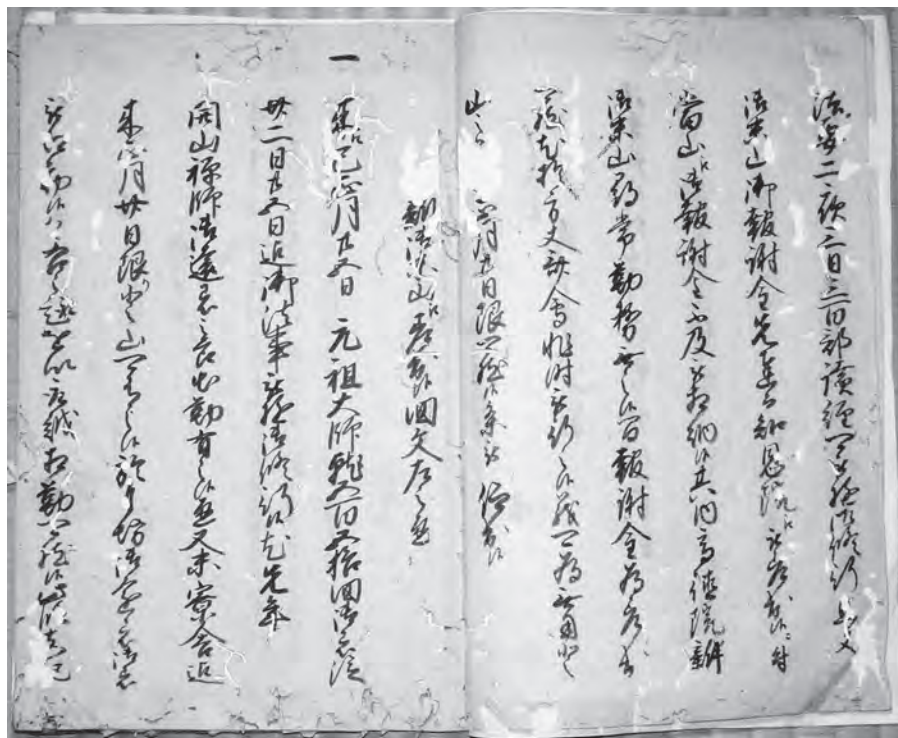


鎌倉光明寺所蔵『元祖大師五百五拾年御忌規鑑』（仮題） 紹介と翻刻

差<sup>(進カ)</sup>□候、□又<sup>(且)</sup> 大師御廟堂之修覆、□外<sup>(其)</sup>□□□<sup>(御)</sup>  
 取繕等、多分之御入用茂有之候間、□門末并□  
 末々之寺院・道心者・檀越之輩ニ至□  
 出情候様ニ、觸下之面々江被相達、觸□□  
 十月限り御勝手次第當山迄、御報□□<sup>(謝カ)</sup>  
 以上、

増上寺役者  
 □五月<sup>(海カ)</sup>  
 鎌倉  
 光明寺御文室

一、御報謝金増上寺江相納候、帳面壹札別□  
 卯十夜南北御末山登山之節、御忌御法要之  
 義、六役中江御直々被 仰出候趣、左之通、  
 一、来<sup>(ル)</sup>□巳正月 元祖大師就五百五拾回御忌御□□  
 「二才



法要二夜三日、三百部讀經可被遊御修行、<sup>(且)</sup>□又

御末山御報謝金、先達而知恩院<sup>江</sup>被差出候ニ付、

當山<sup>江</sup>御報謝金不及被相納候、其内高德院・新<sup>(x■)</sup>

御末山尋常勤務無之候間、報謝金為差出

可然、尤於方丈齋會・非時被行之候義、可為無用、登

山之<sup>□</sup>正月廿日限可然候条、被 仰出候、  
「二ウ

新御末山<sup>江</sup>差出候回文、左之通、

一、来<sup>ル</sup>已正月廿五日 元祖大師就五百五拾回御忌、從

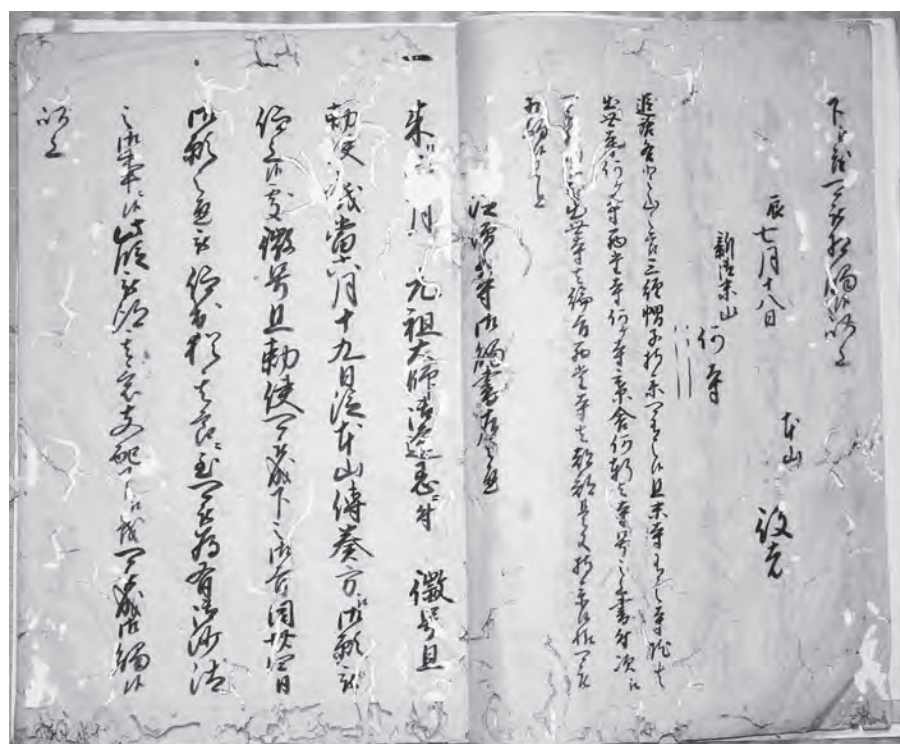
廿二日廿五日迄、御法事被遊御修行候、尤先年

開山禪師御遠忌之節、出勤有之候通、又末・寮舍迄、

来正月廿日限<sup>リ</sup>登山可有之候、於<sup>□</sup>坊御遠忌御忌<sup>(且)</sup>

被<sup>(相)</sup>勤候ハ<sup>(二)</sup>、右之趣を以、取越相勤可然候、此<sup>(段支配)</sup>□□□□

「三才



下江茂可被相觸候、以上、

本山

辰七月十八日

役者

新御末山

何寺

追啓、各登山之節、三經・帽子持参可有之候、且末寺有之寺院者、

出世寺何ヶ寺・西堂寺何ヶ寺・寮舎何軒与、寺号之上書付、次江

(可被相回候 尤力)

□□□□□□出世寺者論旨、西堂寺者都部、是又持参候様可被

相觸候、已上、

(從) □増上寺御觸書、左之通、

「三ウ

一、来月(已正) □月 元祖大師御遠忌ニ付 徽号且

勅使□□、當六月十九日從本山傳奏方江、御願被

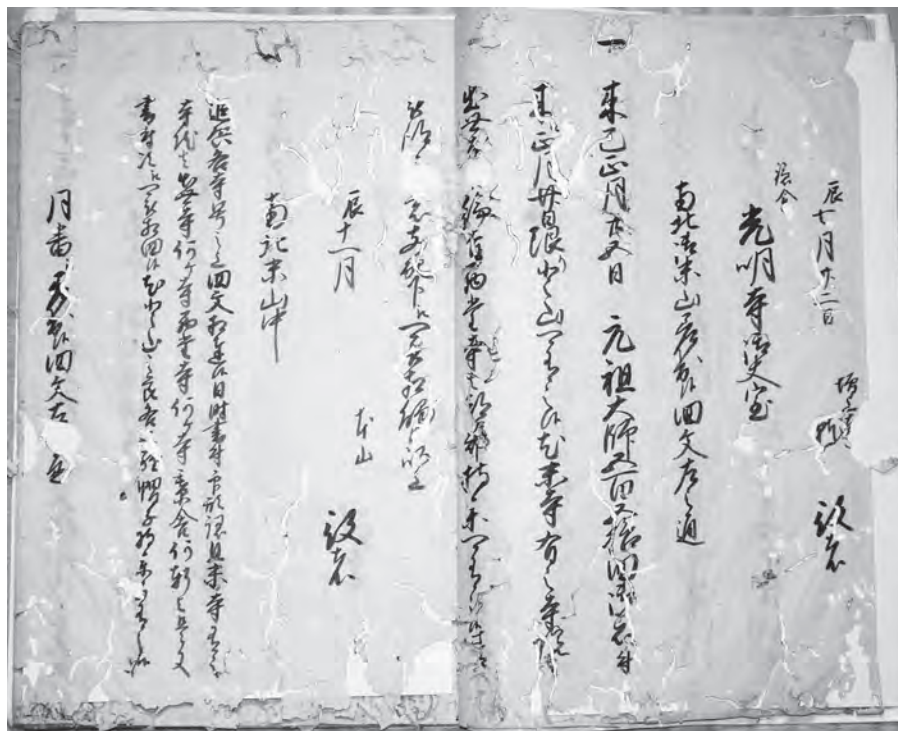
仰上候處、徽号且勅使可被成下之御旨、同廿四日

御願之通被 仰出、猶其節ニ至、可被為有御沙汰

之御事ニ候、此段被得其意、支配下江茂可被成御觸候、

以上、

「四才



辰七月廿二日  
鎌倉  
光明寺御丈室  
増上<sup>(寺)</sup>  
役者

南北御末山差出候回文、左之通、

一、来巳正月廿五日 元祖大師五百五拾回御忌ニ付、

来ル正月廿日限リ登山可有之候、尤末寺有之寺院<sup>(者力)</sup>、

出世<sup>(寺者力)</sup>□□綸旨、西堂寺者□部、持参可有□候、此□<sup>(之)</sup>段力<sup>(其意力)</sup> 四ウ

被得□□、支配下江可被相觸□、以上、

辰十一月  
本山  
役者

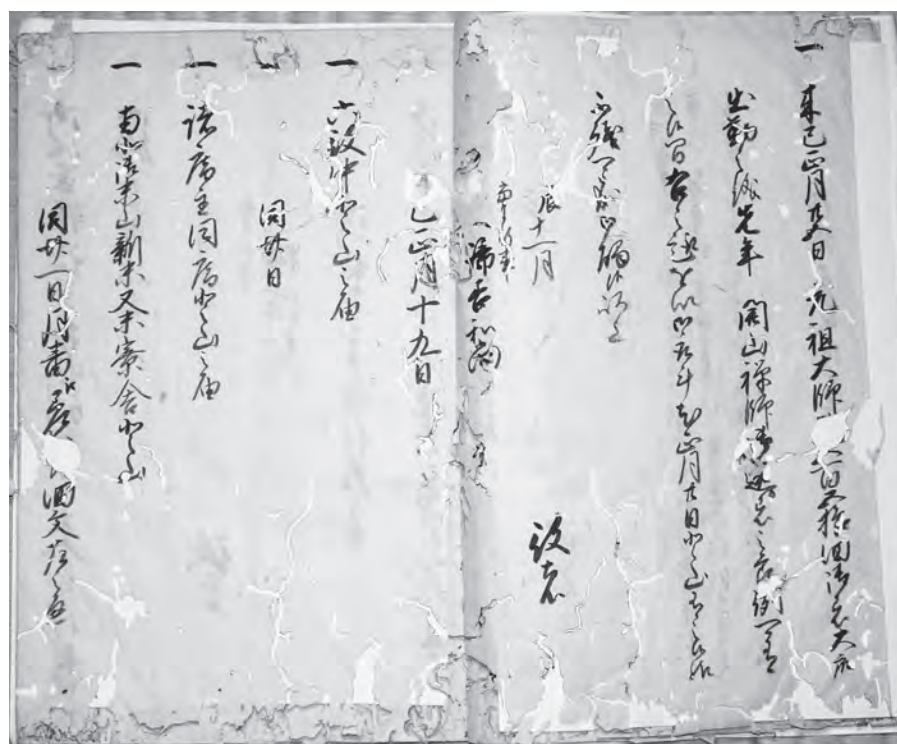
南北末山中

追啓、各寺号之上、回文相達候日時書付、印形認、且末寺有之

寺院者、出世寺何ケ寺・西堂寺何ケ寺・寮舎何軒与、是又

書付、次江可被相回候、尤登山之節、各□經・帽子、持参□有之候、以上、<sup>(三)</sup>  
<sup>(可)</sup>

月番<sup>(江)</sup>□差出候回文、左<sup>(之)</sup>□通、  
「五才



一、来巳正月廿五日 元祖大師<sup>(就力)</sup>□五百五拾回御忌、大衆  
出勤之儀、先年 開山禪師御遠忌之節、例可有  
之候間、右之趣を以御取計、尤正月廿日登山有之候様、  
不殘可被成御觸候、以上、

辰十一月 役者

當月行事  
諦善和尚

「五ウ

巳正月十九日

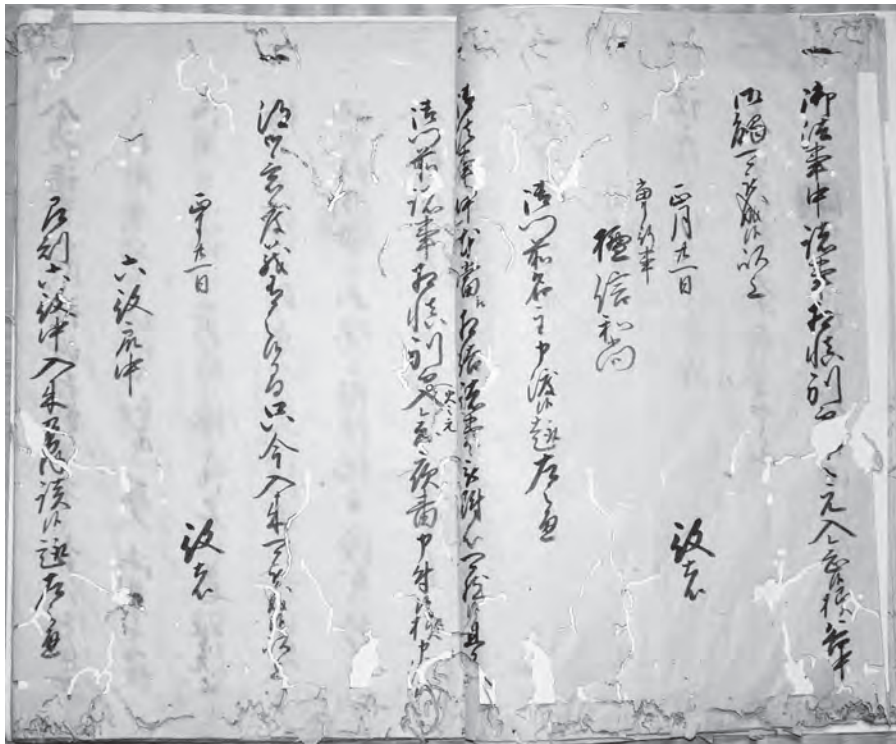
一、六役中登山之届、

同廿日

一、諸庵主・同庵登山之届、

一、南北御末山・新末・又末・寮舎、登山、

同廿一日、月番<sup>(出候力)</sup>差□□回文、左之通、  
「六才



一、御法事中諸事相愼、別而□之元入念候様、谷中

御觸可被成候、以上、

正月廿一日 役者

當月行事

檀信和尚

御門前名主申渡候趣、左之通、

一、御法事中本當江相結、諸事被附心可然候、且□<sub>(又)</sub> 六ウ

火之元

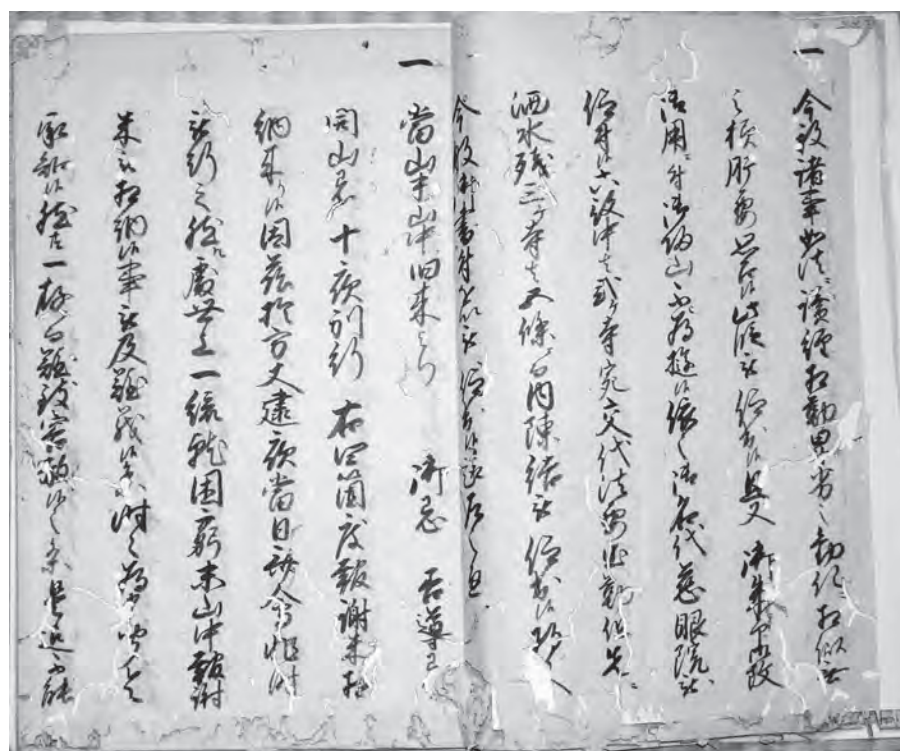
御門前諸事相愼、別而。入念、夜番申付候様申□□、

一、得御意度義有之候間、只今入来可被成候、以上、

正月廿一日 役者

六役衆中

即刻六役中入来□□談候趣、左之通、 七才



一、今般、諸事如法ニ讀經相勤、<sup>(卑)</sup>□劣之勸化ニ相似無

之様、肝要思召候、此段被 仰出候、且又 御朱印御改

御用ニ付、御帰山不被為遊候、依之、御名代慈眼院被

仰付候、六役中者式ヶ寺宛交代、法要出勤、<sup>(但)</sup>□先ニ

洒水、残三ヶ寺者五條ニ而、内陣結被 仰出候、猶<sup>(又)</sup>□

今般御書付を以、被 仰出候趣、左之通、  
「七ウ

一、當山末山中、旧来より 御忌 善導忌

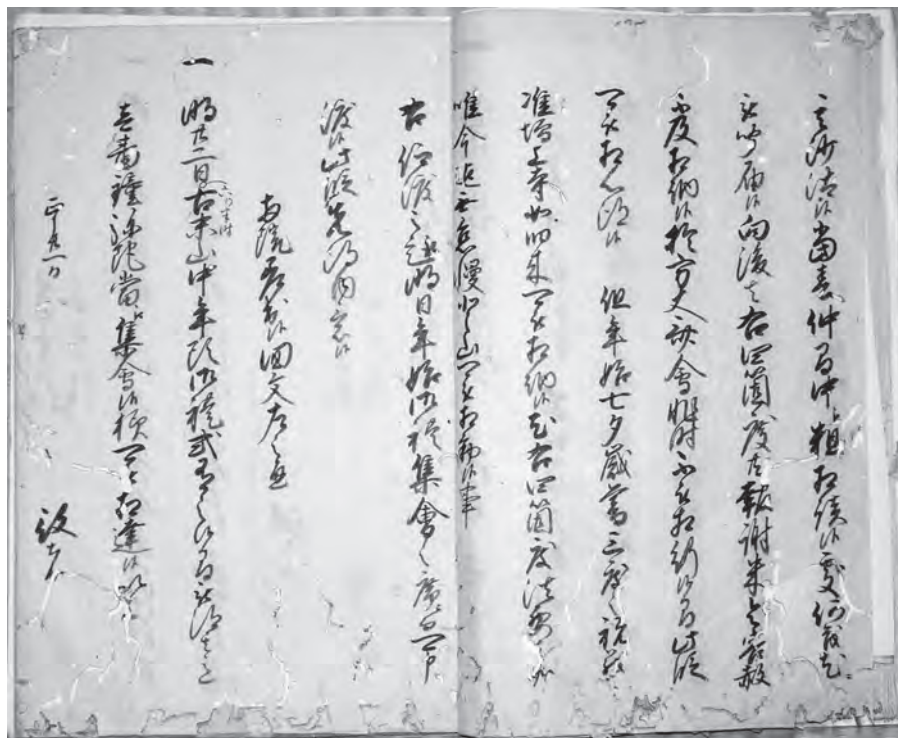
開山忌 十夜別行 右四箇度、報謝米相

納来リ候、因茲於方丈、逮夜・當日、齋會・非時

被行之、然ル處世上一統就困窮、末山中報謝

米被相納候事、被及難義候<sup>(条)</sup>□、時々為<sup>(申)</sup>□聞令

承知候、然共一存ニ而難致容赦候之条、是迄不能  
「八才



其沙汰候、當春仲間中江粗相談候處、何茂尤二  
被聞届候、向後者右四箇度共、報謝米令容赦、

不及相納候、於方丈齋會・非時不被相行候間、此段

可被相心得候、但年始・七夕・歲暮、三度之祝義<sup>(者力)</sup>□、

准増上寺如旧来可被相納候、尤右四箇度法要<sup>(者如力)</sup>□□

唯今迄、無怠慢登山可被相勤候事、

「八ウ

右 仰渡之趣、明日年始御禮集會之席ニ而可申

渡候、此段先得内意候、

兩院差出候回文、左之通、

六ッ半時

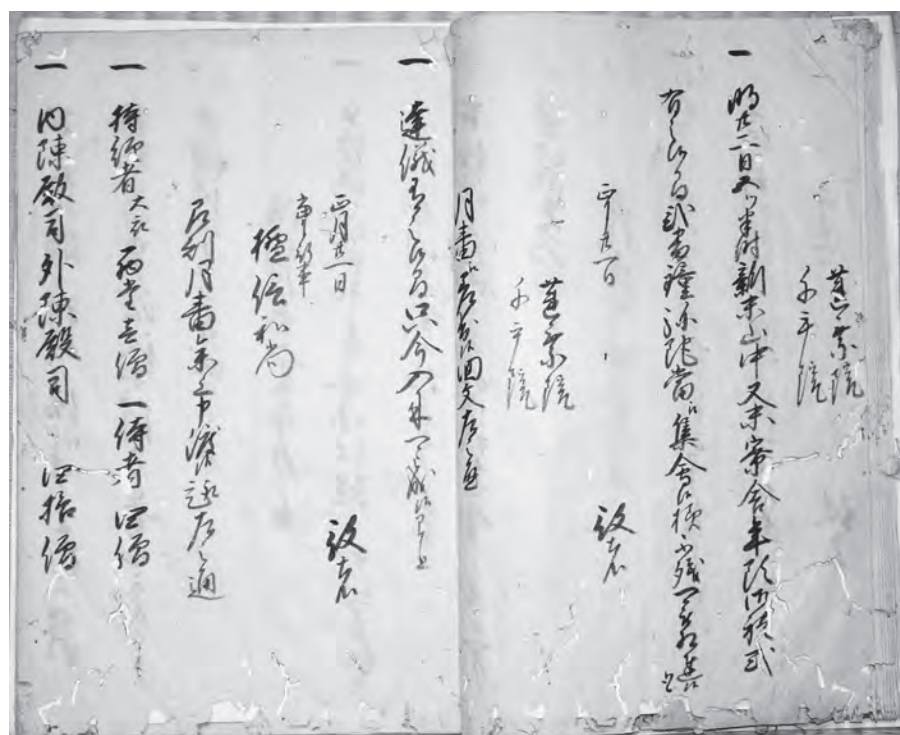
一、明廿二日、古末山中年頭御禮式有之候間、被得其意、

壹番鐘弥陀當<sup>(堂)</sup>江集會候様、可<sup>(被)</sup>□相達候、以上、

正月廿一日

役者

「九才



蓮乗院

千手院

一、明廿二日五ツ半時、新末山中・又末・寮舎、年頭御禮式有之候間、式番鐘弥陀當<sup>(堂)</sup>江集會候様、不殘可被相達候、以上、

正月廿一日

役者

蓮乗院

千手院

月番江差出候回文、左之通、

「九ウ

一、達儀有之候間、只今入来可被成候、已上、

正月廿一日

役者

當月行事

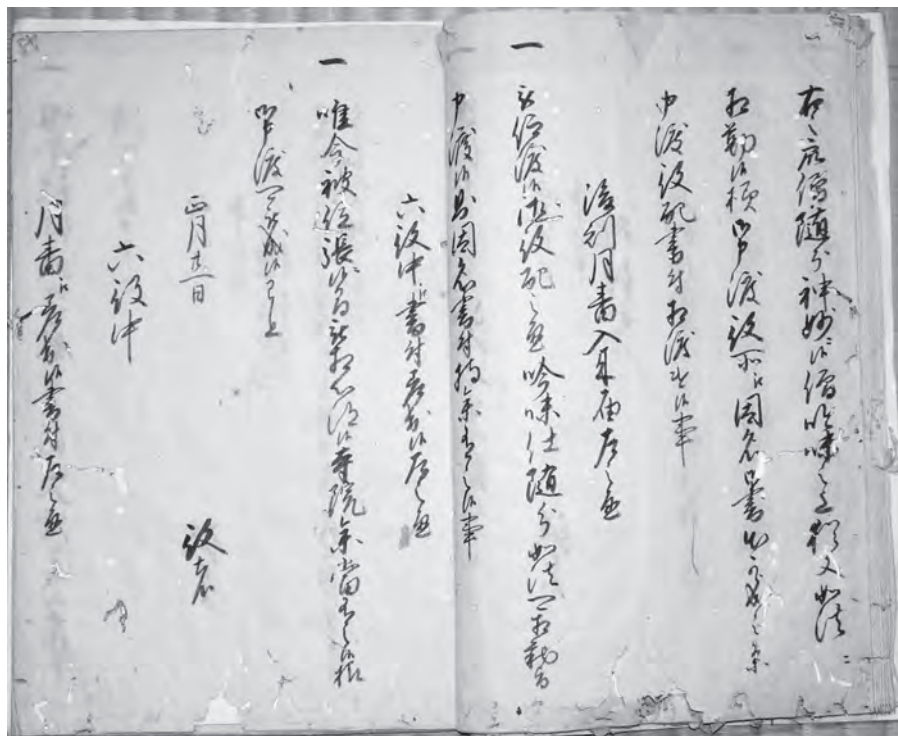
檀信和尚

即刻月番参上、申渡候趣左之通、

一 持經者<sup>大衣</sup> 西堂壹僧 一侍者 四僧

一 内陣殿司・外陣殿司 四拾僧

「十才



右之衆僧随分神妙ニ候僧吟味之上、猶又如法ニ

相勤候様御申渡、役所江因名御書出可被成之条

申渡、役配書付相渡遣候事、

後刻月番入来、届左之通、

一、被仰渡候御役配之通、吟味仕、随分如法可相勤旨

申渡候、則因名書付持参有之候事、

六役中江書付差出候、左之通、

一、唯今被位張ニ候間、被相心得候寺院、参當有之候様、  
(堂)

御申渡可被成候、已上、

正月廿一日

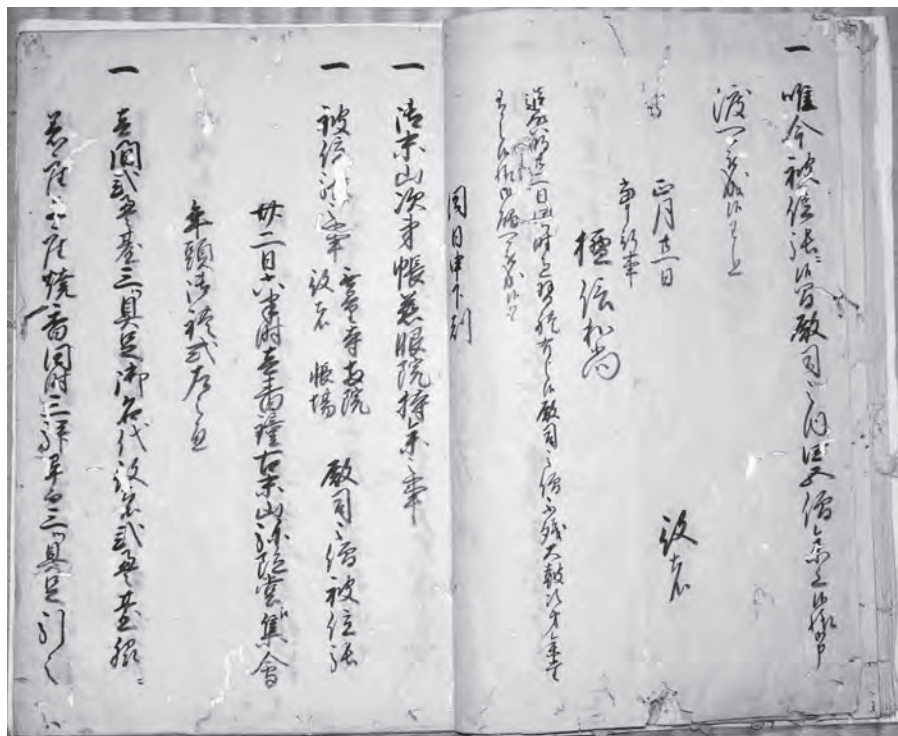
役者

六役中

月番江差出候書付、左之通、

「十一才

」十ウ



一、唯今被位張ニ候間、殿司之内、四五僧参上候様、御申

渡可被成候、已上、

正月廿一日

役者

當月行事  
檀信和尚

追啓、明廿二日四ツ時過習禮有之候、殿司之僧不殘、大鼓次第参堂有之候様、御觸可被成候、以上、

同日申下刻

「十一ウ

一、御末山次第帳、慈眼院持参之事、

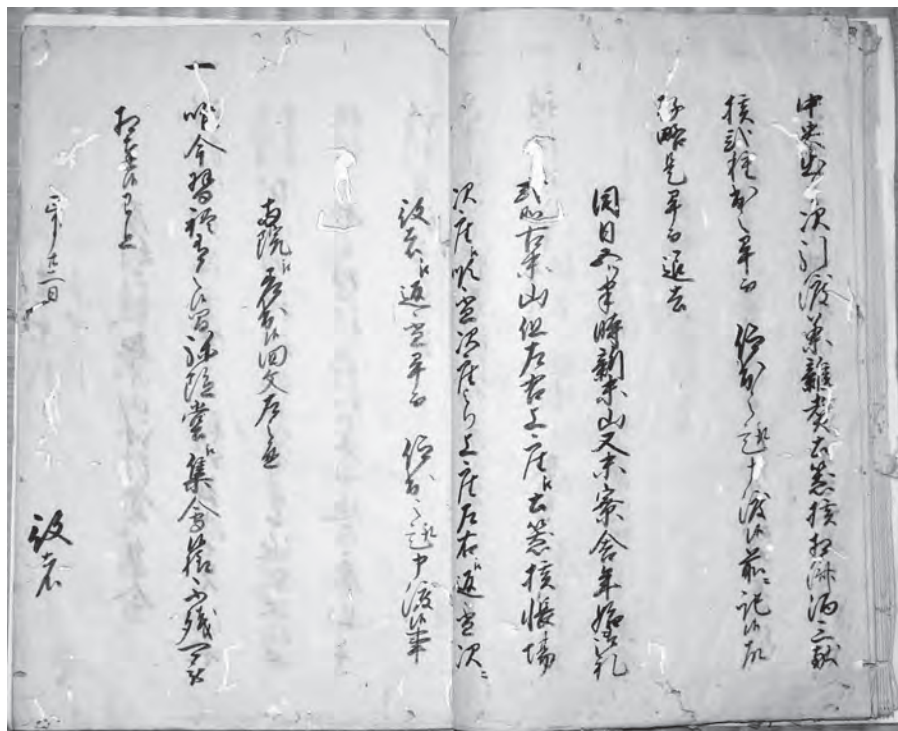
一、被位<sup>(張)</sup>□之事<sup>無量寺・兩院役者・帳場</sup>、殿司之僧被位張、

廿二日六半時杓番鐘、右末山弥陀堂<sup>江集會</sup>、

年頭御禮式、左之通、

一、壺間、式置臺・三ツ具足、御名代役者式置臺脇ニ

着座、<sup>(上カ)</sup>□座焼香、同時三拜、畢而三ツ具足引之、」十二才



中央出□次引渡、茶・雜煮・土器・核相濟、酒三獻・

核式種出之、畢而 仰出之趣<sup>(申)</sup>□渡候、前ニ記候故

□略、<sup>(存)</sup>是畢而退去、

同日五ツ半時、新末山・又末・寮舎、年始御礼

式如古末山、但左右上座<sup>江</sup>土器・核、帳場

次座<sup>江</sup>順盃、次座より上座左右<sup>江</sup>返盃、次ニ「十二ウ

役者<sup>江</sup>返盃、畢而 仰出之趣申渡候事、

両院<sup>江</sup>差出候回文、左之通、

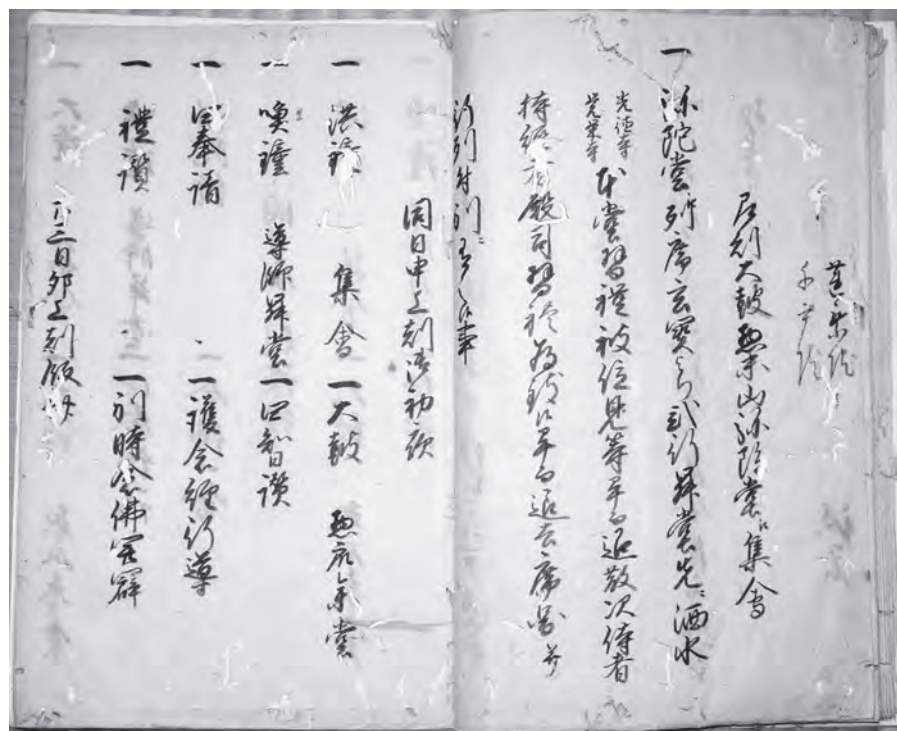
一、<sup>(唯)</sup>□今習禮有之候間、弥陀堂<sup>江</sup>集會候様、不殘可被

相達候、已上、

正月廿二日

役者

「十三才



蓮乘院  
千手院

即刻大鼓、惣末山弥陀堂江集會、

一、弥陀堂江列席、玄関より式行昇堂、先二洒水

光徳寺、  
覺榮寺、本堂習禮、被位見等畢而退散、次侍者

持經（者）□・殿司習禮為致候、畢而退去、席圖并

行列付、別二有之候事、

同日申上刻、御初夜、

一 洪（鐘）□ 集會、 一大鼓 惣衆参堂、

一 喚鐘 導師昇堂、 一四智讃

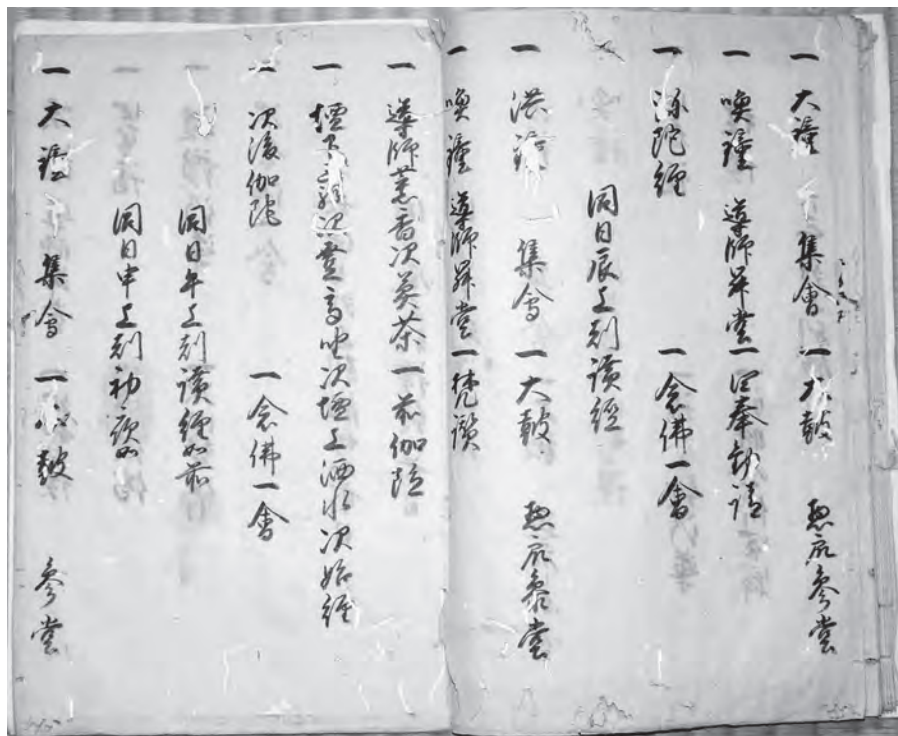
一 四奉請 一護念經行導

一 禮讃 一別時念佛開闢

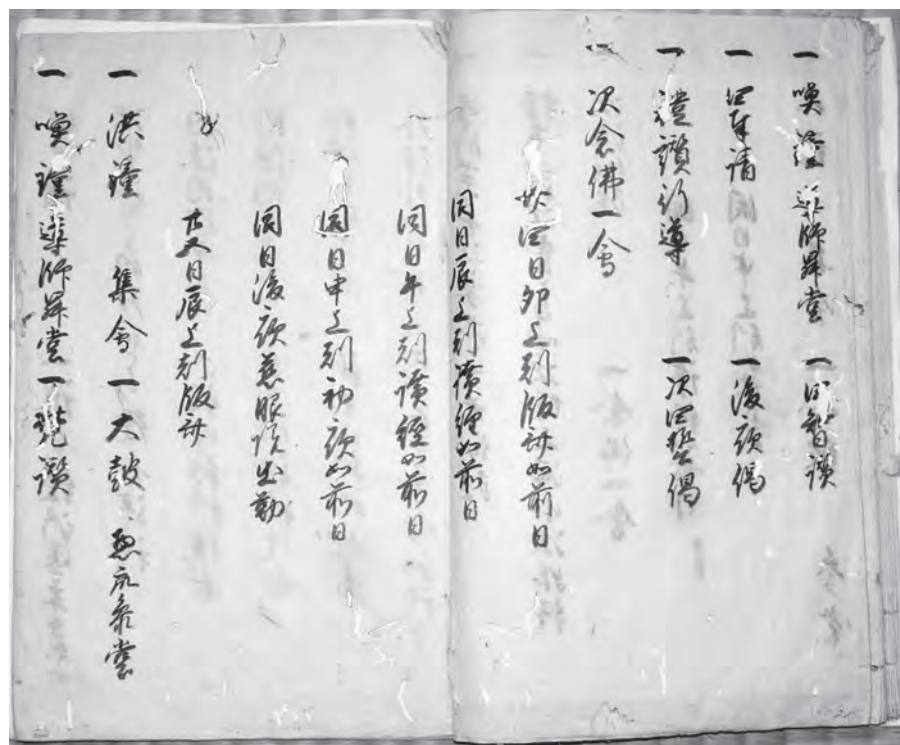
廿三日卯上刻、飯齋、

「 十三ウ

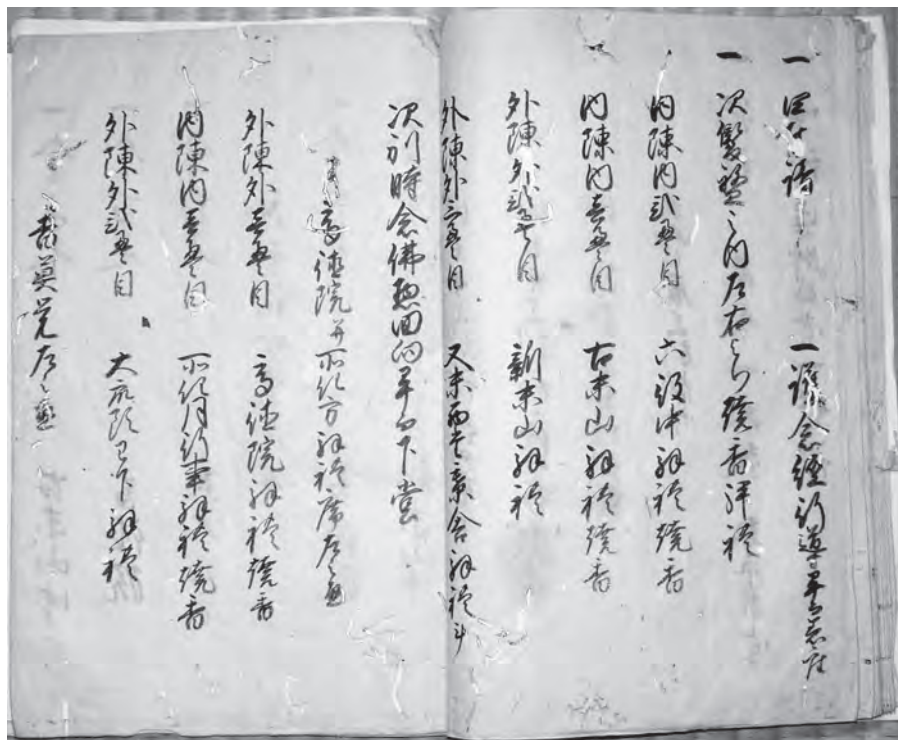
「 十四才



- |   |                       |        |                     |       |
|---|-----------------------|--------|---------------------|-------|
| 一 | 大鐘                    | 集會、    | 一大鼓                 | 惣衆參堂、 |
| 一 | 喚鐘                    | 導師昇堂、  | 一四奉勸請               |       |
| 一 | 弥陀經                   | 一念佛一會  |                     |       |
|   |                       | 同日辰上刻、 | 讀經、                 |       |
| 一 | 洪 <sup>(鐘)</sup> 口    | 集會、    | 一大鼓                 | 惣衆參堂、 |
| 一 | 喚鐘                    | 導師昇堂、  | 一梵讚                 |       |
| 一 | 導師薰香、                 | 次奠茶、   | 一前伽陀                |       |
| 一 | 壇下 <sup>(三)</sup> □拜、 | 次登高坐、  | 次壇上洒水、              | 次始經、  |
| 一 | 次後伽陀                  | 一念佛一會  |                     |       |
|   |                       | 同日午上刻、 | 讀經如前、               |       |
|   |                       | 同日申上刻、 | 初夜如 <sup>(マ、)</sup> |       |
| 一 | 大鐘                    | 集會、    | 一口鼓 <sup>(大)</sup>  | 參堂、   |
- 「十五才
- 「十四ウ



- |   |    |       |   |    |       |   |     |   |       |
|---|----|-------|---|----|-------|---|-----|---|-------|
| 一 | 喚鐘 | 導師昇堂、 | 一 | 喚鐘 | 導師昇堂、 | 一 | 四奉請 | 一 | 四智讚   |
| 一 | 洪鐘 | 集會、   | 一 | 洪鐘 | 集會、   | 一 | 一大鼓 | 一 | 惣衆參堂、 |
| 一 | 喚鐘 | 導師昇堂、 | 一 | 喚鐘 | 導師昇堂、 | 一 | 一梵讚 | 一 | 一梵讚   |
- 
- |   |       |   |               |   |              |   |              |   |              |   |           |
|---|-------|---|---------------|---|--------------|---|--------------|---|--------------|---|-----------|
| 一 | 次念佛一會 | 一 | 廿四日卯上刻、飯齋如前日、 | 一 | 同日辰上刻、讀經如前日、 | 一 | 同日午上刻、讀經如前日、 | 一 | 同日申上刻、初夜如前日、 | 一 | 同日辰上刻、飯齋、 |
| 一 | 禮讚行導  | 一 | 同日辰上刻、讀經如前日、  | 一 | 同日午上刻、讀經如前日、 | 一 | 同日申上刻、初夜如前日、 | 一 | 同日辰上刻、飯齋、    | 一 | 同日辰上刻、飯齋、 |
| 一 | 一次四誓偈 | 一 | 同日辰上刻、讀經如前日、  | 一 | 同日午上刻、讀經如前日、 | 一 | 同日申上刻、初夜如前日、 | 一 | 同日辰上刻、飯齋、    | 一 | 同日辰上刻、飯齋、 |



一 四□請 (奉) 一護念經行導、畢而着座、

一 次雙盤之内左右より焼香、拜禮、

内陣内式疊目、 六役中拜禮、焼香、

内陣内式疊目、 古末山拜禮、焼香、

外陣外式疊目、 新末山拜禮、

外陣外三疊目、 又末・西堂・寮舎拜禮計、

次別時念佛、惣回向、畢而下堂、

高徳院并所化方拜禮、席左之通、

外陣外式疊目、 高徳院拜禮、焼香、

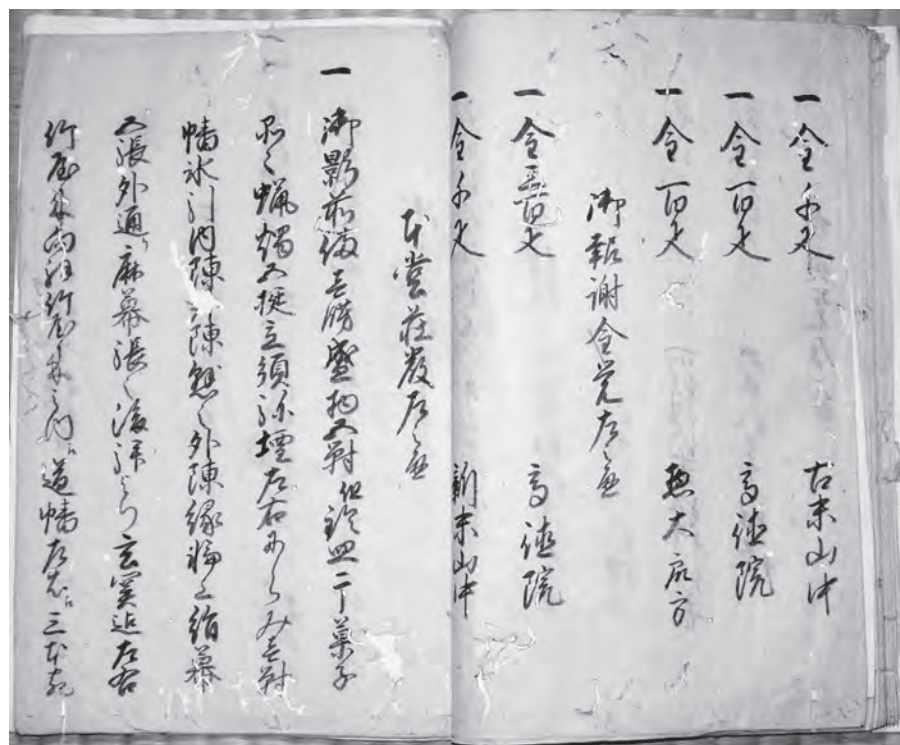
内陣内式疊目、 所化・月行事拜禮、焼香、

外陣外式疊目、 大衆頭已下拜禮、

香奠覚、左之通、

「十六ウ

「十七才



一金千疋 古末山中

一金百疋 高德院

一金百疋 惣大衆方

御報謝金覺、左之通、

一金三百疋 高德院

一金千疋 新末山中

本堂莊嚴、左之通、

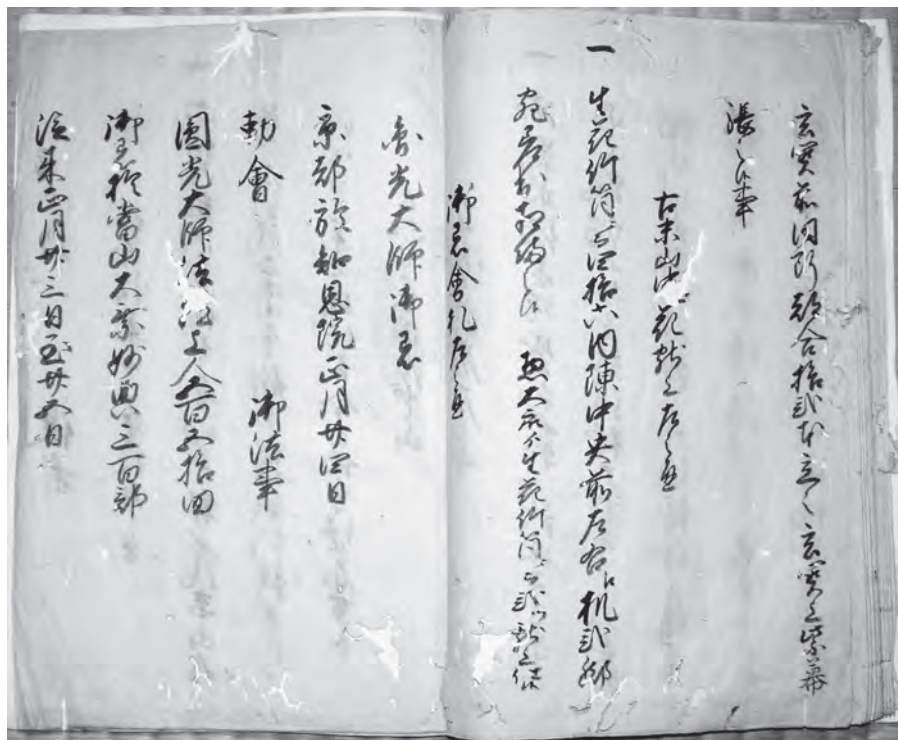
一、御影前備壺饒盛物五對、但鈴皿干菓子

品々、蠟燭五挺立、須弥壇左右にらみ壺對、

幡・氷引内陣<sup>(水)</sup>陣懸之、外陣縁輪上絹幕<sup>(外)</sup>

五張、外通リ麻幕張之、後拜より玄關迄左右

竹屋来、向拜竹屋来之内<sup>(矢)</sup>江道幡、左右<sup>(矢)</sup>江三本苑、  
十八才



玄關前同断、都合拾式本立之、玄關上紫幕

張之候事、

右末山□□花献上、(中五九)左之通、

一、生花竹筒三而四拾六、内陣中央前左右江机式脚

宛差出相備之候、惣大衆ヨリ生花、竹筒三而式ッ献上仕候、

御忌會札、左之通、  
「十八ウ

圓光大師御忌、

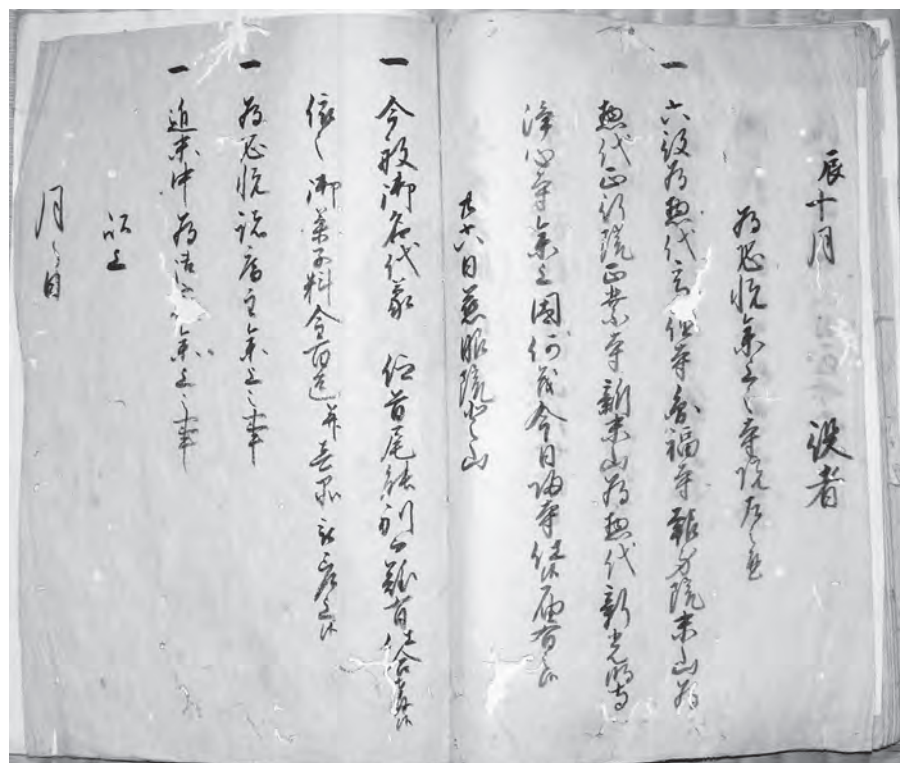
京都於知恩院、正月廿四日

勅會 御法事、

圓光大師法□(然)上人五百五拾回

御忌、於當山大乘妙典三百部、

從來正月廿三日至廿五日、  
「十九才



辰十月

役者

為恐悦参上之寺院、左之通、

一、六役為惣代高<sup>(德)</sup>寺・圓福寺・報身院、末山為

惣代正行院・正業寺、新末山為惣代新光明寺・

浄心寺参上、因何茂今日帰寺仕候届有之候、

廿六日慈眼院登山、

一、今般御名代蒙 仰、首尾能別而難有仕合<sup>(奉存)</sup>候、

依之、御菓子料金百匹并壺品被差上候、

一、為恐悦、諸庵主参上之事、

一、近末中為御□、参上之事、

以上、

月 日

十九ウ

二十才

